

ジャンル
書店論・書誌学

寿郎社の新刊案内

〒060-0807 札幌市北区北七条西2丁目37山京ビル
電話011-708-8565 FAX011-708-8566
メール:info@jurousha.com サイト:www.jurousha.com

米軍潜水艦が出没する海を渡り樺太までセドリにいっ猛者がいた。廃棄寸前の朝鮮総督府払下げ品をどっさり買い込む目利きがいた——。現役の古書店主が執念で調べ上げた〈外地〉の古書店事情と〈内地〉とのネットワーク。

北海道新聞

2026年 令和8年 1月4日 日曜日

ほん 8
読書ナビ

植民地時代の古本屋たち

増補
新装版

樺太・台湾・朝鮮・満洲・
中华民国——空白の庶民史

沖田信悦

OKITA Shinetu

2025年
10月下旬刊

A5判上製 256頁(予定)
定価:本体2800円+税(税込3080円)
ISBN978-4-909281-73-9 C0000

主要内容

[増補新装版] 刊行にあたって 沖田信悦
[初版] はじめに

[増補資料] 植民地時代の地図と時刻表

第一章 樺太へ渡った古本屋たち

樺太古書籍商組合の入会状況/豊原の古書店/1936年(昭和11年)の古書市全道大会/真岡の古書店/大泊の古書店/恵須取と塔路の古書店/敷香の古書店/樺太の新聞雑誌屋/終戦一年前の状況/古書店主が見た樺太/全国古書籍統制組合及施設組合一覧

第二章 台湾へ渡った古本屋たち

台北の書物蚤の市/台北古書籍商組合/台北市の古書店/昭和16年ころの状況/三省堂と東都書籍と日記

第三章 朝鮮へ渡った古本屋たち

昭和6年の朝鮮古書業界/京城の古書店/朝鮮古書店に触れた記事から/平壤の古書店/釜山の古書店/大邱の古書店/新義州の古書店/朝鮮の古書籍商組合と京城書物同好会/満鮮山東の旅

第四章 満洲へ渡った古本屋たち

ツブシと東京巖松堂/満洲における古本屋の進出拠点/満洲各地の古書店たち/大連の古書店/奉天の古書店/新京の古書店/安東の古書店

第五章 中华民国へ渡った古本屋たち

昭和一四年ころの上海/中华民国維新政府と三通書局/共同租界地



良書を求めて海越えて

「いくら買つても片端から売れるし、(略)余り売れない異段に高い値をつけるのですが、それでも飛ぶように売れ全くなれない様でした」
この他、平壤、釜山、大邱などにも古本屋があった。それぞれの地で同業者の組合が結成された。樺太、台湾、満洲、中华民国でも同様で、人が住むところには本と本屋が必須だったことがわかる。台湾では愛書家による「書物同好会」が発足し、古本屋と共同で古本市を開催した。ことや、建国当時の満洲国では、国内と異なり、古本屋で「マルクスエンゲルス全集」などの左翼書が販売されていたことなど、興味深いエピソードが見つかる。

古本屋の仕事は「売る」こと以上に「買う」ことが大事だとされる。いい本を安く仕入れるために、内地の古本屋が海を渡って訪れた。そこでは現地の古本屋との下々禁止の駆け引きが行われた。巻末には、本を求めて植民地を旅した古本屋の手記が再録されている。

終戦を迎えると、古本屋たちも内地に引き揚げるようになった。貴重な本がソ連兵にたぎつけにされたことに怒り、荷物制限を無視してなるべく多くの本を日本に持ち帰った。そしてまた古本屋を再開する。

自身も古本屋である著者は、植民地における同業者の営みを知りたいという思いから、長年調査を続けてきた。それを知る古本屋仲間も多くの資料を提供している。植民地における古本屋のネットワークを探った本書もまた、現代の古本屋のネットワークを支えられて生まれたのだ。(寿郎社 3080円)

評 南陀倭綾繁(ライター、編集者)

植民地時代の古本屋たち
増補新装版
沖田信悦著

おきた・しんえつ 1946年
新潟県生まれ。明治大卒業。現在、千原船橋市で古書店経営。著書に『千葉県古書籍商組合略史』など

*本書は地方小扱いですので一部の書店を除き新刊記本はありません。必ず事前のご予約(ご注文)をお願いします。

寿郎社 FAX011-708-8566まで

(注文短冊)

<p>流通センター 取扱品</p> <p>書店名(番線)</p> <p>御担当者名</p>	<p>発行所</p> <p>寿郎社</p>	<p>編著者名</p> <p>沖田信悦 著</p>	<p>本体価格(税抜)</p> <p>2800円</p>	<p>発注日</p> <p>月 日</p>
	<p>注文数</p> <p>冊</p>	<p>[新刊]</p> <p>植民地時代の古本屋たち</p> <p>樺太・台湾・朝鮮・満洲・ 中华民国——空白の庶民史</p> <p>〈増補新装版〉</p> <p>ISBN978-4-902281-73-9</p>		